

沖縄県における思春期性教育の現状と課題 ～スマホ社会、若者の望まない妊娠と性感染症をめぐって～

桑江 喜代子

一般社団法人沖縄県助産師会

2008年「おくり人」という映画がありました。翻って私たち助産師は「迎え人」だねと、当時は助産師であることを誇りに思い、互いにモチベーションをあげたことを思い出します。

命が生まれる瞬間の緊張と安堵、喜び、そして、何より助産師で良かったと思える瞬間です。

私は、平成23年に25年間務めた産婦人科病院を退職しましたが、25年の勤務は赤ちゃん誕生の幸せなことばかりではありませんでした。元気な産声をあげて誕生した子供たちが、中・高校生になり産婦人科外来や思春期外来に来院する親娘・養護教諭が増えてきたことです。思春期は、異性への関心と同時に性に関する情報に翻弄され、誤った知識のままに行動した結果、予期せぬ妊娠や出産、人工妊娠中絶、性感染症等、思春期の性の現状と課題は医療現場に於いても深刻でした。そのことは、迎え人として心が痛み、悩み、何をすべきか考える契機となりました。

総務省の調査によると（2019年）13～19歳の個人スマホ保有率は、80%で中・高校生はスマホネイティブ世代です。いつでも、どこでも、誰とでも繋がるのが出来るのです。

本県は、全国一の出生率を誇る子沢山の県ですが、10代の若年妊産婦の割合は全国（1.1%）に対し（2.6%）と2倍以上となっています。10代で妊娠・出産する若年妊産婦の中には、妊娠を周囲に相談できない、パートナーや家族から経済面を含めた支援が得られない、育児のサポートが得にくい等、孤立したケースがままあります。シングルマザーの出現率、離婚率も全国一で、本県は、こどもの4人に1人が「貧困状態」を生む要因にも繋がっています。時代と共に社会環境が変わり、スマホ社会の性に関する情報が氾濫する昨今、性に関する課題も変化しています。

深刻化する子どもへの性犯罪や性暴力の被害を減らすこと、10代若年者の望まない妊娠や中絶、性感染症を予防するために学校、家庭、地域、医療・行政が連携し、小学校低・中・高学年、中学、高校、と成長に応じた性教育を実施し、被害者だけでなく加害者や傍観者にならないためにも「教育こそ最良のワクチン」を合言葉に、取り組んでいます。しかしながら、教育現場は必ずしも積極的とは言えないのが現状です。沖縄県助産師会では思春期性教育プロジェクトチームを立ち上げ、行政と連携し思春期性教育教室を開催していますが、プログラムの内容、教材など分かりやすく伝える工夫が必要です。また、指導者の育成等、課題が山積しています。

今回のシンポジウムを通して皆様のご助言・ご指導が得られますと幸いです。